特集1・新しい緑化の思想と実践

造園にみる欧米主義と日本主義

二宮孝嗣*

キーワード：庭の成立，幾何学整形式，対置，内包

1. はじめに

筆者は、およそ40ヶ国において造園や緑づくりの現場を視察し、また、実際数カ国において、その事業に携わった。この経験を基にして、わが国の造園技術と特に欧米の造園技術の比較検討を行い、その技術の成立過程を考えるとともに、技術の背景にある文化的相違を考察し、日本の造園技術と欧米の造園技術の特質の差違を概括した。さらに、わが国の造園業界の現状をこの特質から考え、将来の造園、緑づくりの文化と技術のあるべき方向について考察した。

2. 庭の成立

さまざまな地域、国家をめぐるしてみると、意外と「庭」を造る文化をもつ民族は少ないことに気がつく。確かに、世界各国の都市部においては、都市計画にともなう公共緑化は進められており、富裕層のもつ庭などにおいて、緑づくりの現場をいくつも見る事ができるが、国民が広く、庭を作って生活を楽しむという文化と呼べるものが確かにあると思われる国は、欧米や東アジアなどきわめて限られるのではないかと思われた。

そもそも欧米における庭の起源はメソポタミアやナイル文明にその源流は始まり、その姿は、バビロンの空中庭園の記録やエジプトの壁画の中にも認めることはできる。

空中庭園とは今でいう屋上庭園のようなものなので、干しレンガで作られた宮殿の屋上にチグリス河から水を汲み上げ、植物（主にナツメヤシ）を育てていたと考えられている。またエジプトの壁画に残っている庭は、暑く乾燥した熱風から緑を守

るためにレンガに囲まれた中に植物を栽培していたとされている。

こういった乾燥地帯における造園は、乏しい水を用いて緑をつくること自体が困難であって、これを所有すること自体が、建築構造物の建設と同様に権力と経済力の存在を証明するものである。

厳しい自然の中では、人は自然を克服することが大きなテーマであって、存在証明としての人工の存在、自然管理能力は、それが人工であればあるほど価値を持つものであったに違いないと思われる。

欧米の庭の源流はもう一つにはギリシャ哲学に求めることができるであろう。ギリシャにおける数学の発達と、数学的に整理された美への希求は、デザインとしての幾何学性へと発展したといわれる。この点で、乾燥地帯にあるイスラム圏でも数学、幾何学的美の追求と共通した基盤があると思われる。

このような源流は、エジプト、メソポタミアからギリシャに移り、さらに中世西アジアにサラセン帝国が起りイスラム文化が南ヨーロッパを席卷し、遠くスペインにまでその勢力はおよび、南スペインにアルハンブラ宮殿という至宝を残し、それは現在も見る事ができる。その庭の中に現在のイギリス庭園の原形を見いだすのは筆者だけではあるまい。その後十字軍の遠征により広くイスラム文化がキリスト教ヨーロッパに広がりその影響は遠くイギリスにまで及ぶ。幾たびかの十字軍の遠征によってその通過点であるイタリアに巨万の富が蓄積されることになる。特にフィレンツェに集積した富により、そこにイタリアルネッサンスが始まることとなる。多くの富裕階層の人々が先を競って週末の休暇と避暑をかねたヴィラ（別荘）を山裾の豊富な水と高低差

Approaching toward western and eastern garden style each other

*セイセイナーセリー Koji NINOMIYA

を巧みに利用して造り、ここにイタリア式庭園がうまれた。その姿は現在もローマ郊外や北イタリアの湖水地方に見ることができる。

その後富と文化の中心はフランス王室に移り、イタリア式庭園や、その源流であるイスラム文化の影響を受けながらベルサイユ宮殿に代表される幾何学的なフランス式庭園が生まれる。その後大航海時代の幕開けとなり、スペイン、ポルトガル、オランダとめまぐるしく富と権力は移り変わり、18世紀にイギリスに行き着くこととなる。それにともない庭園文化もイギリスへと移る。イギリスでは初期には多くのフランス式庭園が造られた。今でもそれをハンプトンコートに見ることができる。その後、ケイパビリティー・ブラウンという一人の天才が現れ多くの自然風形式イギリス庭園を残し、一方では庶民の庭であるコテッジガーデンを生み出しながら現在にいたっている。このようにヨーロッパの庭は富と権力のうつろいに伴いながら多様な形式の庭を今に残している。

ただし、ヨーロッパにおける庭のあり方は、社会の歴史的発展の過程とともに変化し、植民地からプラントハンターが持ち帰った珍しい植物を飾ることから始まったと思われる、いわゆるイングリッシュガーデンなど、多様な表現様式を持つに至っている。

一方、東アジアにおいても、ヨーロッパ同様に、権力の成立とともに庭が生まれたと考えられている。中国では、洞庭湖などの美しい自然を取り込みながらも、奇岩を集めた庭など、建築構造物と一体となった庭があって、権力者の私的独占物としての位置を占めていたものと思われる。

近年、発掘された飛鳥時代の朝廷の庭の基本構造も、当初は、中国文化の模倣から始まった可能性も高いが、その後、中国との交流の断絶と、長期の社会的安定、浄土思想の普及などに特徴づけられる平安時代へと移り、日本的な造園技術が深化していくことになる。その後、室町、江戸と時代は移り、桂離宮をもってひとつの頂点と筆者は考える。

こうした造園史については、多くの研究や著作があり、ここで解説するまでもないが、庭の成立に関する大きな要因は、欧米であれ、東アジア、日本であれ、富を独占する政治権力ないしは宗教権力の成立に深く関係し、庭の表現様式は、権力を誇示する性質をもつもの、権力者の嗜好、宗教思想の表現のいずれかの形式の中で発展していったものであろう。

3. 庭にみる欧米主義と日本主義

いま、ヨーロッパの系譜を引く造園文化とその技術のあり方を欧米主義と呼び、わが国固有のあり方を日本主義と呼ぶこととする。この区別によって比較すると、類似点とともに両者には大きな違いがあることが分かる。

3.1 設計思想とその表現

例えば、イギリスのフォーマルガーデンには長方形の敷地を十字に園路が区切りその中心に水を持つてくる所がある。こういった形式は、イスラムの影響もあるが、命の源である水が世界の四方に流れ出し、そこに人類の歴史が始まるという旧約聖書の話象徴的に表現していると思われる。同様に、日本でも、水を生命として捉え、泉に湧きだし、小さな速い流れから、滝となって流れ落ち、やがては緩やかな流れを経て、海に擬した池に注ぐ形式は、自然の凝縮形であると同時に、人間の一生を二重に投影したものであると考えられている。

命を水に例える点は同じであるが、ギリシャ伝統の「develop = 発展」の思想に基づいた生命観と、流転、転回の人生を表象するアジアの思想の差は表現形となって歴然とした差が生まれている。前者はまた、人工の幾何学であり、後者は不定形でもある。

また、欧米では、カラフルな花や緑の組み合わせによって、明るさ、喜び、安らぎなどの情緒的な感動を与え、同時にこれを幾何学的に限りなくパターン化して、そこに自然に対置する人間のかかわり方を暗示しているように思われる庭園がよくみられる。

他方、日本では極力目立ち、自己主張のつよい花を避け、むしろ、つばみのように小さな一輪のツバキ、「わび助」のように目立たないがゆえに、見いだす力が観察者に要求される存在を意図的に隠す工夫がされることがある。こういった表現は、心の奥底に静かに迫ることにより、訪れた人に安心を感じさせ、目立つことよりもかえって強いインパクトを与えることは心理学的にも明らかである。また、人工的な直線形状や幾何学構造を徹底的に排除していくことにより、美の表現を目指すことは、欧米的な美意識との対極にあると位置づけることもできよう。

3.2 庭の空間構成

多くの庭は、建築構造物と不可分な存在である。

写真1 幾何学整形庭園の一例

写真2 現代のイギリス庭園の一例

欧米においては、庭から建築物へと視線が向くことが多い。壁面を飾る植物や建物に沿って植え込まれた花壇の存在などは、特に装飾的な存在であって、建築構造物の価値を一段と高める作用を成している。

一方、和風庭園の場合、室内や縁側から庭を眺め、むしろ、観察者も含め、家と一体となった連続的な空間構成によって景観を組み上げている。

3.3 素材の選択と使い方

欧米で用いられる植物は、植林地などから持ち込まれた植物も多いが、派手な花をつける草花、まっすぐ立ち上がった樹形のぶれない木（自形性の高い樹種と呼ばれる）が多用される。こういった植物は、それ自体で一定の景観の独立性を有した存在であって、全体の空間においての有機性には乏しいと考えられる。

しかしながら、逆に日本では自形性の強い樹種はあまり多くは使われず、むしろ、木々を寄せて植え、その組み合わせによって美しさの表現を求めようとする。寄せて植えることにより、樹木はその条件にだけ応じた形で応える、その応えた形を良しとする発想が根底にあると考えられる（この場合、組み合わせに応じて、柔軟に樹形を整えることができる性質がある木を他形性が高い樹種と呼ばれる）。

このような発想の根源は、おそらくわが国が発達した森の国であって、とりわけ原生林で見る森の組み合わせの妙、美しさを古来認めてきた伝統に基づいているのかもしれない。

3.4 観察者と対象植物（自然）の位置関係

観察者と植栽された植物、ひいては庭の自然がどのような位置関係に立っているかは、きわめて重要である。向かい合う対置的な位置関係では、植物は、対象化され、一体感を生むことはないが、よく観察するに適している。欧米にみられる植栽植物の多くは、この観察対象ともなる。このとき、観察者が、舗装され、境界が明瞭化された小道に立っていれば、いよいよ、この傾向はつよくなる。わが国においても、大名庭園と呼ばれる大規模な庭園では、このような対象化が行われることが多いが、茶庭などでは、このような試みは徹底して排除される。むしろ、植物のつくる小自然の中に観察者自体が取り込まれ、観察者が観察者でなくなるような内包化の試みがなされる。

観察者と植物の位置は、見下ろす、見上げるといった位置の上下関係にも表れる。

見下ろすことは、ある意味で征服的な要素がつよいといわれるが、本格的な日本庭園で造成されることが多い山を擬した築山では、その上に小道をつけるケースが少ないことは注目されることかもしれない。

3.5 人工性

庭の持つ人工性は、欧米の場合は、これまでも触れた幾何学デザインに集約されるが、わが国や東アジアにおける人工性は、全く表現形式は異なり、自然の根底を表現するために心を乱すものすべてを取り除いていく抽象化、デフォルメの形式となって

表れる。つまり、究極の自然の核心の姿として、色も命も存在しない、砂利と石だけを使って表現される枯れ山水に辿り着くこととなる。

4. 伝統的造園技術とその衰退

わが国は、樹木の種数が多い生物多様性の高い国である。これらの木々は、地質が複雑で、地震の多いことからくる多様な地形立地、寒暖の差が大きい南北に長い列島の上で、多様な自然を生み出している。発達した森林や草地、疎林など景観的にもバラエティーがあって、その中に人々が美しいと歴史的に感じてきた多くの自然の形がある。

これを背景にして、わが国の造園技術、造園文化が醸成されてきたことは疑いないが、この固有の文化の骨格は、明らかに自然を良く知る人々が築いてきたことには疑いが無い。

イギリスでは、プランツマンと呼ばれる豊富な植物の知識を持った人が地域にはいて、造園設計の段階から参加してくることが多い。彼等の知識は植物の名前や学名はもちろんのこと、どんな気候条件、土壌条件が適しているとかどんな植物と相性がよいかといったことを熟知しており、植栽計画全体に大きな影響力を持っている。また、ガーデンドesignerも彼等に負けない知識を持っている人が多く、設計図に学名と品種名を記載することすら当然のこととなっている。

現状の日本では、専門家の間で、このような植物に対する深い見識をもつ人をイギリスのように各地域でそれぞれ探すことは容易ではないと思われる。むしろ、欧米よりもはるかに植物やその他材料に対する知識が要求される造園にあって、その知識を欠く現実の存在は、造園の伝統文化、技術にあって、一つの危機的状況にあることを物語っている。

和風庭園の場合、どんなに図面をしっかりと描いても多くの場合、石の形やモミジの枝振りなどは施主には伝わりにくく、またそれらの材料の組み合わせ方や選び方は庭師の感性によるところが非常に大きい。同じ材料でも庭師によってそれぞれ全く違った表現方法で庭が出来上がっていくのが和風庭園であり、また庭師の腕の見せどころでもある。

しかしながら、こういった造園は徐々にニーズを

失い、わが国の造園は全体としては、徐々に欧米的な洋風造園へと向かっていることは否定できないであろう。

このことの理由は、第一に、生活様式の変化にともなって洋風庭園がよりマッチする空間となってきたこと、第二に、設計図面通りの庭が、設計通りの価格、期間で実現する、施主に対する説得力の高さにあると考えられる。

5. おわりに

今確実に日本の造園事情は動き始めている。しかし、現場では多くの不安を抱えながらも、わが国の造園業がいかなる方向へと進むかについて、確信を持つ者は少ない。

和風庭園が良いのか、洋風庭園がこれからの主流になるのかといった平板な議論を越えて、専門家が知っておくべき知識やあるいはもっと根源にある見識を持つことが必要であろう。これまで、多くの造園デザイナーが公共緑地の造成に取り組み、その結果、全国の緑地景観がどれも類似して、地域の個性が失われたという声も多い。

この根本原因の一つは、日本の伝統的な造園技術の衰退と、数量管理、施工性などの点で、より説得性が高い欧米的な設計思想がわが国に導入された結果であることは疑いが無い。善し悪しは別にして、こういった欧米的な造園は、個人ニーズに応える形として、まだ拡大する可能性はあるが、そのことにより、わが国の造園技術や見識は深化していくとは思えない。

確かに欧米的な造園技術には学ぶべき点が多いが、それと同時に、まともな日本庭園を作り上げるだけの力量も併せ持つだけの努力が要求される時代は、むしろ近いのではないと思われる。

それは、日本の造園文化；組み合わせの中で植栽木のそれぞれが美しく生きる姿、境界感の少ない親和的、一体的、内包的な空間、景観構成要素のそれぞれが自己主張を抑え、見る者の心に残る景色、粗密の流れや不定形の内に秘めた景観としての収まりが投影する心象の深さ、こういったものを実現する技術こそが、今後、グローバルにも求められる技術ではないかと考えられるからである。